29Y-am10

過去の実習成果を基に考えた実務実習指導カリキュラム改良に関わる提案

○久保　みさき[1], 林　高弘[1], 山田　成樹[1]（[1]藤田保健衛生大学病院 薬）

【目的】実務実習は長期に亘るため、実習生のモチベーション維持や教育成果の評価方法の工夫が必要と考える。今回、より効果的な指導カリキュラムへと改良するために、実務実習報告会（以下、報告会）における薬学部教員や指導薬剤師による評価結果及び実習生を対象とした満足度調査の結果を用いて実務実習における実習生の成長度を調査したので報告する。【方法】 2010～2012 年度に当院で開催した実習生による報告会において、薬学部教員及び指導薬剤師が知識・技能・態度に関わる各項目について実習生ごとに 6 点満点の 6 段階評価をした結果を集計し、中間報告会と最終報告会のそれぞれを比較した。また、同期間に当院で実務実習を受けた実習生 81 名を対象に、報告会について 6 点満点の 6 段階評価での満足度調査を行い、中間報告会と最終報告会の結果を比較した。【結果】評価点数の比較では、「発表内容が明確であった」が 4.54±0.33 点から 4.87±0.38 点（P＜0.01）など、すべての項目において中間報告会から最終報告会にかけて有意な増加がみられた。満足度調査結果も同様に、「報告会実施が実習成果を上げるために役立ったか？」が 4.74±1.01 点から 5.30±0.81 点（P＜0.01）など、各項目いずれも有意な増加が認められた。【考察】実習の進行と共に行った２度の報告会の実施が実習生の成績を有意に向上させることが明らかとなり、実習成果を上げるために効果的であると考えられた。一方、満足度調査からも中間報告会から最終報告会にかけて学生のモチベーションは向上していると思われた。以上より、充実した実務実習を行うためには、実習生個々に自主性と目的意識を持たせる、段階的評価を行う、薬学部教員との協働指導を行う等の要素をカリキュラムに組み入れる工夫が必要と考える。